

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

外間守善、宮古歌謡体系化の軌跡

著者	新里 幸昭
出版者	法政大学沖縄文化研究所
雑誌名	沖縄文化研究
巻	42
ページ	167-185
発行年	2015-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10114/9954

外間守善、宮古歌謡体系化の軌跡

新里 幸昭

一、はじめに

外間守善先生が琉球大学に赴任されてきたのは、一九六三（昭和三八）年であった。奄美、沖縄、宮古、八重山を総合的に調査研究していこうという構想で、この年大学に琉球大学沖縄文化研究所が設立された。翌年、宮古の言語・文学・地理・民俗の調査をすることになった。文学班（外間守善）の調査助手として本村勝史さん（琉球大学学生）と筆者も加わった。

この調査について、筆者は、一九八九年八月二五日の『落ち穂』（『琉球新報』）で次のように述べている。「島の方々は、進んで宿に来てアヤグを謡って下さった。〈略〉数日も立たないうちに、九〇分テープ一三本に、六〇余曲の歌謡と二〇篇のユガタイが収録された。その熱心な協力にかかわらず文字起こしと訳づけの作業が一向に捗らない。一時間の話し言葉の文字起こしで五、六時間、まして歌謡となると、その倍はかかる。島の方にもついて貰ったが、三分の一以上が、沖縄に持ち帰る破目になった。苦心惨憺の末、音声表記ができたのが大学ノート六冊分。訳をつけるのに辞典なし。しかも古典語で、私は沖縄人である。池間出身の知人の母親の案内で、十貫瀬、神里原、二年前と、歌謡に詳しい方々を尋ね、那覇中を歩きまわったものである。四年後、『解体新書』よろしく八割がた訳をつ

け、島を訪ねた。その結果、資料の大半を修正せざるを得なかった。調査の仕方が未熟で、宮古口、特に歌謡語に不慣れのせいであつた。携えていった三八三枚〔注〕の原稿は、即『宮古島の神歌』にはならなかった。この書を生むための確かな土壌になつた。」と。宮古出身の本村さんと一緒の時は、テープ起こしはいいものの、彼が不在の時は、難渋した。外間先生は、「私は文学理論の研究、君達は、歌謡資料整理」と、言い渡した。が、池間のアークがない一九六八年版の報告書になつてゐる。

筆者の宮古滞在は七月二五日ごろから八月二五日までの約三〇日。街の泉旅館に二、三日いて、史跡を訪ねたりして、その後池間に渡つた。二九日ごろから調査を始めている。

外間先生は、平良の町で垣花良香氏から多良間の歌謡を、狩俣で狩俣吉蔵氏に「狩俣祖神のニーリ」を、砂川でも調査をしていたようである。そして、那覇市琉大研究室で記した八月一三日付けの葉書で「現地ではできない仕事を優先させて、能率的に、効果的にスケジュールを組んだほうがよいでしょう。教生もあることだし、二三日には、仕事が完了するように予定表による仕事をしたほうがよいと思います。」としている。

大学の後期講義が始まって、本村さんが、「狩俣祖神のニーリ」の音声表記の確認を外間研究室でしていた。

一九六八年七月二五日再び宮古を訪ねることになった。数日ほど外間氏とともに池間島で確認調査を行った。この後狩俣で先生と筆者は、タービとフサなどの神歌が謡われる主な祭祀との関係を上地区長に教えてもらい、いくつかの基本的なジャーシ、フサ、タービの採集をした。後、もう他の神歌を教えることができないという神女達の発言の後、外間先生は八重山に発たれてしまった。そして再び狩俣に戻つてこなかった。その理由を上地区長や神女達に話し、引き続きご協力をお願いした。先生がおいでにならないとあつて、かえつて狩俣の方々は親身に調査協力してくださつた。特に集落の最高神女アブンマ平良マツ（董名カマドメガ）さんは、神歌を教えてくださるだけでなく、真夏の暑い盛りに神聖なフンムイ（大杜）、マイバナダ、ティンダウなどの神山や磯津御嶽にも案内してくださつた。

先生は、一九六四年、一九六八年の臨地調査だけであつた、と自伝でも述べている。後を任された筆者は、新しく採集した歌謡資料などを、その都度先生に送っていた。

その後、一九八六（昭和六一）年の『沖縄の歴史と文化』（中央公論社）の出版祝賀会と還暦祝いが那覇で催された時、菊枝夫人を宮古に案内することになった。東平安名岬めぐり、狩俣の大山家での大人の掌大のガサミ蟹のご馳走、大山さんの平良市連合婦人会メンバーの歓迎会が野村レストランで催された。それが先生に同行した最後であつた。

筆者は、一九六四年、一九六八年の歌謡調査以来、先生の宮古歌謡体系化の軌跡を管見してきた。そして現在も狩俣の方々に支えられ歌謡調査を続けている。その関係で体系化について述べていくことにする。以下敬称は略する。
〔注〕ここで、原稿用紙の枚数四八〇枚を手元に有る三八三枚に訂正しておく。

二、宮古歌謡への体系化の歩み

外間の宮古歌謡の体系化への試みがみられる多くの著書論文から、次の著述をとり挙げていく。※アラビア数字で記されていた年月日などは漢数字に直した。

- 1、「琉球文学の展望」(『文学 一九六五 7 Vol.33』岩波書店一九六五(昭和四〇)年 No.1 七月所収。)
- 2、「宮古の文学」(琉球大学沖縄文化研究所の総合調査研究報告書『宮古諸島 学術調査研究報告 言語・文学 編一九六八年』一九六八(昭和四三)年四月二二日所収。)
- 3、「宮古島狩俣の神歌」(『文学 12 Vol.36』岩波書店一九六八(昭和四三)年二月一〇日所収)
- 4、「宮古島の歌謡」(外間守善・新里幸昭編『宮古島の神歌』三一書房 一九七二(昭和四七)年八月三十一日)

所収)

5、「宮古の歌謡」(外間守善・新里幸昭編『南島歌謡大成Ⅲ 宮古篇』角川書店一九七八(昭和五三)年六月三〇日所収)

6、『私の沖縄と沖縄学』(沖縄学研究所二〇〇五年八月二七日)

1、琉球文学の展望

これは、外間の宮古の歌謡について述べた最初の論文である。

外間は、二〇〇五年『私の沖縄と沖縄学』で、「私は二十四歳の年に初めて、折口信夫先生の「国文学の発生」という大論文を読んだんです。(略)再び私が「国文学の発生」にめぐりあうのは、三十八歳の年でした。三十八歳の年に、西郷信綱さんの『詩の発生』という本を読んだんです。(略)そして「目が覚める」「目から鱗が落ちる」ほどの衝撃があったことを述べている。が、後述する新里恵二の話も良くなされていたので、その影響もあったとも考える。

外間のこの論文について筆者は、『宮古の歌謡 付・宮古歌謡語辞典』(沖縄タイムス社 二〇〇三年)で次のように記している。外間が、

「文学発生の基盤は祭式のある」という立場から、琉球文学の発生を祭式の魔術的詞章に求め、そこから叙事詩、さらには抒情詩へと発展していったことを説いたものである。「一 琉球文学の発生」「二 叙事詩の時代」「三 叙情詩の時代」「四 劇文学の時代」「五 宮古の文学」「六 八重山の文学」という章立ての仕方からも、その発想がうかがえる。詩の発生原理を軸にすえ、琉球文学史上に英雄時代を想定し、沖縄・宮古・八重山

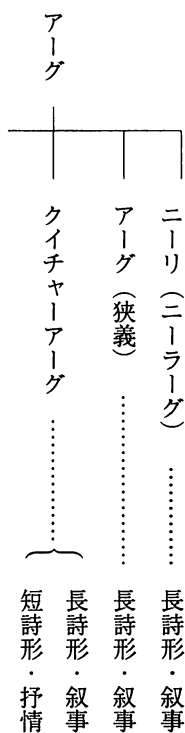
の文学を展望したものであった。しかし、この章立てにみられるように、沖縄中心の展開で、宮古・八重山については個別にしか論じられていなかった。このことは、両地域の歌謡の研究が進んでいなかったことを意味していた。

である。

折口、西郷、新里の影響を受けたものと考えられるが、琉球文学を最初に紹介した一九〇〇年（明治三二）年田島利三郎「琉球語研究資料」（『国光』所収）の「一、おもしろ 二、おたかべの詞 三、御拝つゞ 四、碑文 五、おもいこわいにや 六、歌 七、組踊 先島の歌 文字と発音について 附録」という構成と外間論文のとは、沖縄中心であるという点で大きな違いはない。

2、宮古の文学

一九六八年四月二二日「宮古の文学」は、琉球大学沖縄文化研究所の総合調査研究報告書『宮古諸島 学術調査研究報告 言語・文学編一九六八年におさめたものである。次のようにまとめている。



トーガニアーク	短詩形・抒情
シヨンガニー	短詩形・抒情

この頃、歌謡の掲載されている書といえ、一九二七（昭和二）年慶世村恒任『宮古史伝』や稲村賢敷一九五七（昭和三二）年『宮古島庶民史』一九六二（昭和三七）年『宮古島旧記並史歌集解』、そのほか土工四ぐらいであった。慶世村はこの著書で、宮古の歌謡を「長アヤゴ、クイチャーアヤゴ、トーガネ、シユンカネ、其他（後、其他「特種のアヤゴ」と）」し池間島の調査報告をしている。資料編には、多良間のニル六篇、池間島のユガタイ一〇篇、池間島の呪詛の文句一篇である。紙幅の都合もあったかもしれないが池間島の歌謡は、収載されていない。

3、宮古島狩俣の神歌

一九六八年七月、一九六四年の池間島の調査資料（原稿用紙三八三枚ほど）を携えて確認作業が始まった。当初は、録音したテープから歌詞を起こし、沖縄に戻ってもその作業をして、那覇在住の池間の方々を訪ね、その逐語訳をした。歌謡テープの文字起こし、逐語訳は八割がたできたと思っていたが、確認調査の際に多くの間違いを指摘され、再調査することになった。最初の調査方法の反省を踏まえて、正確な資料を記録するために、まず歌詞を言ってもらい、次に逐語訳をつけていく、最後に謡っていく、という順をとった。そして聞き漏らしがあるかもしれないので、その間録音をしていく方法であった。狩俣の神女達は、歌詞の順序を間違えないように何度も口の中で確認しながら、言ってくれた。狩俣の神祭りの現場では、歌詞の順序の間違いが多多あり、それを神役の前任者がさりげなく合図を送り、直しながら神歌を謡っていく。祭りで何度となくその場面がみられたので、生活の場での採集が適切

であることが確認できた。

狩俣では、上地区長を訪ね、協力を仰いだ。そのお蔭で、男性が謡うピヤーシをはじめ、女性のピヤーシも記録することができた。そしてタービ、フサがあることがわかった。この成果を、外間は、「宮古島狩俣の神歌」で報告している。その構成は、つぎのようである。

まえがき 一 狩俣の祭祀 二 祭祀と神歌 三 神歌の内容

1 フサ 2 タービ 3 ピヤーシ 4 ニーリ

神歌として、フサ、タービ、ピヤーシが加えられ、フサやタービが謡われる祭祀との関係、それらの神歌の例を挙げ紹介している。新しい神歌の発見は、ひどく興奮を伴ったものであった。上地区長の説明で、謡われる神祭りと歌謡の大枠を筆者も把握することができたが、外間は、タービやピヤーシの語義は不明である、としている。外間の論文に筆者はタービについてのメモを貼り付け、外間に報告している。それは、以下の通りである。

狩俣のタービの中で、タービと謡う部分を、タカビ、タービと謡う例について（その頻度）。

※タカビ

根の世勝りのタービ	三ヶ所	上の家マトウルギのタービ	一ヶ所
大城元のタービ	一ヶ所	父真玉のタービ	一ヶ所
前真玉のタービ	一ヶ所	真屋の真誇りのタービ	一ヶ所
金作り親大按司のタービ	一ヶ所		

※タービ

太陽の大按司のタービ	二ヶ所	大城元のタービ	一ヶ所
父真玉のタービ	一ヶ所	前真玉のタービ	一ヶ所
真屋の真誇りのタービ	一ヶ所	金作り親大按司のタービ	一ヶ所

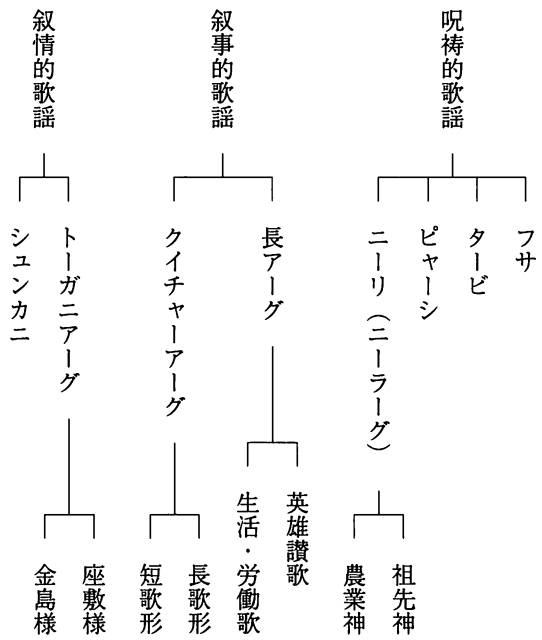
狩俣方言のカ行子音がハ行子音化、すなわちkaがhaになりさらに長音化する、またeがiに変化することによって「タカベ takabe (崇べ)」が「タービ ta:bi」になったということであった。これは、外間の後の論文で生かされることになる。

一九六八年「二月三〇日 昼一二時」日付、「六九 一 一」消印の外間の手紙に、「タービの件、ご批正有難う。再考してみます。いずれにせよ、狩俣の神歌はその全容をもう一度発表しましょう。オモロ語で解ける部分がありますし、宮古出身の人にとっても、しばらくは歯が立たないはずです。」と、記している。

4、宮古島の歌謡

一九七二年外間は、四月『文学 一九七二年 4 Vol.40』ではじめて「呪縛的などの」「叙事的歌謡」「叙情的歌謡」という用語を用いて解説を行なっている。筆者と共編『宮古島の神歌』（三一書房）上記論文でも宮古歌謡の全体像を表にして解説しているので、それをあげる。

宮古歌謡の史的変遷は、今まで明らかにされた資料を基にして、ほぼつぎのように整理することができそうである。



宮古の歌謡は、一般的にアーグ（アヤゴ）といういい方で総称されているが、アーグが生まれる前の唱え物的な神歌に、フサ、タービ、ピヤーシと呼ばれるものがあり、それらはニーリを通じてアーグにもつながるものであることがわかってきた。タービは神々を崇べ奉る「崇^なべ」の意で、奄美のターブイ、沖縄のオタカベと字義どおり通ずるし、フサはその内容から、奄美、沖縄のクチ、八重山のフツと類似している。

宮古島でよばれている歌謡の具体的名称を、呪祷的歌謡、叙事的歌謡、叙情的歌謡のカテゴリーで括り、抽象化し、普遍化を試みたものである。

それ以前に、沖縄の歴史をどのようにとらえるか、という問題提起をして沖縄歴史研究界に激震を発信した一九六一年新里恵二「考える沖縄歴史」（『沖縄タイムス』、一九七〇年『沖縄史を考える』改題出版、勁草書房）があった。その中で英雄時代を設定して、「叙事詩（オモロ）から抒情詩（琉歌）への移り変わり」を説いている。沖縄文学を世界文学の中で普遍化を考えたものであった。折口や西郷だけでなく、新里のこの考えにも触発され、沖縄文学は沖縄文学としてその体系化を考えればいいのではないか、ということ、当初「叙事詩の時代」、「抒情詩の時代」、「劇文学の時代」としてその体系化を試みたものと考えられる。が、批判もあり、再考することになったのである。

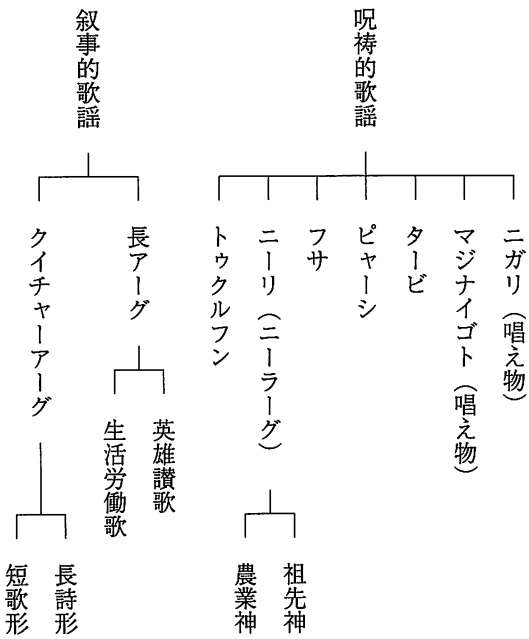
叙事詩の時代以前ということ、模索していた時、探し当てたのが倉野憲司や大久保正の「呪祷」という言葉・考えであった、と推察される。外間はその種本である倉野憲司『上代日本古典文学の研究』（昭和四三年版 桜楓社）大久保正『上代日本文学概説』（昭和四七年版 秀英出版）の二冊を筆者に送ってきた。それが、この理由である。それには「呪祷の文学」「呪祷文学の展開と固定」「叙事文学の展開と諸相」などの章立てのことがあり、日本文学の事例を具体的に挙げて論を展開している。広く文学にとらえるのではなく、歌謡に限定し、しかも呪祷的歌謡など「的」という言葉を用いたところに帰着したといえよう。

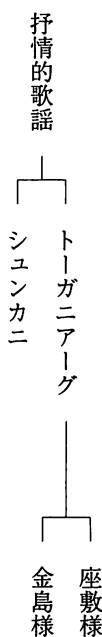
二〇一四年竹内重雄は、「外間先生のご研究に接して」（二〇一四年五月『沖縄文化』第48巻2号）¹¹⁶ 外間守善先生追悼特集号）で次のように述べている。

外間先生は、慎重に慎重を重ねて、沖縄文学史を提示なされた。それは呪祷的歌謡から叙事的歌謡、さらに叙情的歌謡への移り変わりを明らかにされたものだが、「呪祷的歌謡」「叙事的歌謡」「叙情的歌謡」という用語が使われて、

歌謡に限定して組み立てなされた。

5、「宮古の歌謡」(『南島歌謡大成Ⅲ 宮古篇』角川書店一九七八(昭和五三)年六月三〇日所収)
外間は「形態的分類」として次のようにまとめている。

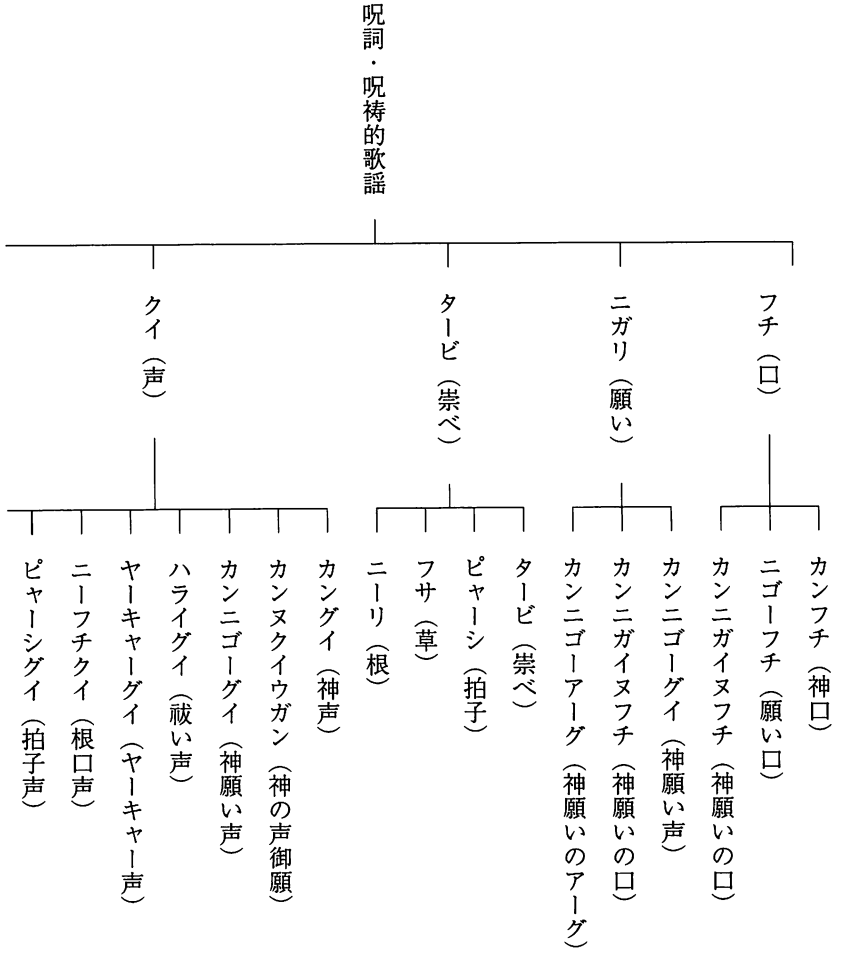


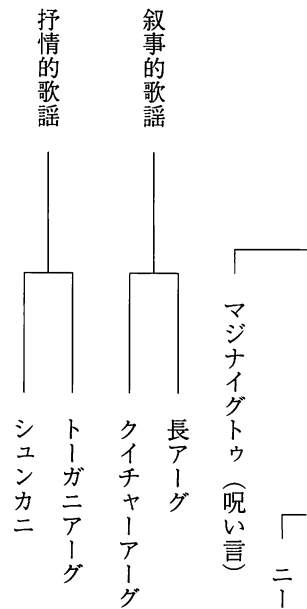


一九七二（昭和四七）年まで記述のなかったニガリ（唱え物）、マジナイゴト（唱え物）、トゥクルフンが新しく加わっている。これは、一九七六（昭和五一）年筆者の「宮古の文学」（『鑑賞 日本古典文学 第25巻 南島文学』角川書店所収）の提言を受けたものである。すなわち、一九七二年外間の「南島歌謡の系譜（下）」で示した呪禱的歌謡・叙事的歌謡・叙情的歌謡というパターンや「アークが生まれる前の唱え物」という指摘を踏まえて、唱え物として「呪詛の文句」「ニガリ」、呪禱的歌謡の「トゥクルフン」を報告したことによるものである。沖縄には、唱えもののミセゼル、オタカベがあり、同様に宮古にも唱えものの「ニガリ」があったのを提示したものであった。後で「トゥクルフン」はクイヂャーであること、マジナイグトゥを島の言葉でジューンと分かり訂正した。これも歌謡研究が全体的に進んでいなかったことを示したものである。筆者が「仲嶺元の朔日のニガリ」のほか六篇のニガリの資料を提出し本書に収めたのである。ニガリが市民権を獲得したのである。

6、『私の沖縄と沖縄学』（二〇〇五年八月二七日沖縄学研究所）

本書の「呪言・呪謡を中心にしてみる南島文学」では、『南島文学論』（一九九五（平成七）年）に記載されていないかったカンフチ、ニゴーフチ、カンニガイヌフチの具体的呼称にカンフチ（神口）、ニゴーフチ（願いの口）、カンニガイヌフチ（神願いの口）などと括弧の中に対応する文字を与えて形態的分類を行なっている。





外間は、奄美以南八重山までを俯瞰して呪詞・呪禱的歌謡をつらぬく「クチ（□）、クイ（声）、ニガリ（願い）、タービ（崇べ）」の言葉をもとにして、呪詞・呪禱的歌謡、叙事的歌謡、抒情的歌謡の形態的一覧表を地域ごとに提示している。その中で宮古では、フチ（□）ニガリ（願い）タービ（崇べ）クイ（声）マジナイグトウ（呪い言）であるといい、フチ（□）のつく言葉には、カンフチ（神□）ニゴーフチ（願い□）カンニガイヌフチ（神願いの□）があるとしている。

カンフチは神の声であり託宣であるともいえよう。ニゴーフチ・カンニガイヌフチは神に対する人々の願いである。神と人々の口が入り混じっているまま表示している。クイ（声）もわかりである。

ニゴーフチ、カンニガイヌフチ、カンニゴークイ、カンニゴアアゲ、カンヌクイウガン、カンニゴークイは、ニガリとして纏めることができるのである。

筆者は、二〇〇三年『宮古の歌謡 付・宮古歌謡語辞典』（沖縄タイムス社）で、「しかし、フチ（□）でくくられているニゴーフチ・カンニガイヌフチと、ニガリ（願い）でくくられているカンニゴークイとの関係や、その違いに

については判然としない。さらに神々を崇べて村落の願いを謡い唱えるニガリ（願い）と、タービ（崇べ）との差異も分からなくなっている」と、指摘したのもこの理由である。

三、まとめ

外間の「呪言・呪謡を中心にしてみる南島文学」の提起を踏まえ、まず宮古で具体的に唱えられる唱えもの、謡われる歌謡をわけて「宮古の歌謡」（沖縄宮古民謡協会『創立40周年記念誌』二〇一三（平成二五）年一二月）でも宮古歌謡を報告したが、さらに次のように考えてみたい。

次に、外間が説く複雑な呼び名を、唱えものと謡いものに分けて、次のようにまとめることができる。

唱えもの

ニゴーフチ（願い口）系統。神へ願う形。

カンニゴーグイ（神願い声）、ニゴーフチ（願い口）、カンニガイヌフチ（神願いの口）、カンニゴーアーグ（神願いのアーグ）、カンヌクイウガン（神の声御願）、

カンフチ（神口）系統。神の託宣的形。

カンフチ（神口）、カングイ（神声）、

マジナイグトウ（呪い言）

謡いもの

タービ（崇べ）、ピヤーシ（拍子）、フサ（草）、ニーリ（根）、ハライグイ（祓い声）、ヤーキヤーグイ（ヤー

キヤー声)、ニーフチクイ(根口声)、ピヤーシグイ(拍子声)、ニーラグイ(根声)

さらに、筆者の「狩俣部落の神祭りと年中行事」(前記『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』所収)で補いながら呪詞・呪禱的歌謡について話を進めていく。

唱えものに「ニガリ(願い)」「ニゴグイ(願い声)」を補う。

謡いものは、カングイ(神声)とも呼ばれ、タービはタービグイ、ピヤーシはピヤーシグイともいい、おだてる、という意味である。神々をおだてて囃し、その見返りとして、豊穡を恵んでもらうという意味である。静的な「拍子」でなく、動的な「囃し」である。ピヤーシは、男女の神役によって、夏祭りに謡われる。

ニーリはニーラグまたは丁寧に言うといなりアグで、狩俣では男性によって夏祭りに謡われる。現世に近い英雄を謡った史歌的性格の歌謡が初期のアーク(長アーク)であり、それ以前の祖先・祖先神たちの活躍・業績を謡ったのがニーリである。ニーリまたはニーラグは、根の国にいます祖先神を謡ったニーラのアーク(歌謡)という意味である。狩俣ではニーリ、ニーラグ、砂川ではニーリ、多良間島ではニルと呼ばれ伝承されている。が、上野村では、「にーりにーりみり(謡を謡ってごらん)」というように、アーク(歌謡)の意味で用いられている。

タービは夏祭り、フサは冬祭り、いずれも神女によって謡われる。

ハライグイ(祓い声)は、旧暦二月、七月、八月のアーズヤマ(東山)の夏祭りの時だけでなく、冬祭りの時ウヤーン(祖神祭)にもよく謡われる。したがって、タービではない。前出筆者の「狩俣部落の神祭りと年中行事」にそれを証明する記述があるのでその一部を紹介する。p.は、収載本のページである。

p.512 二月 東山 ニガリ「祓い声」(東山で)、タービ仲嶺元ウヤバー(ウフミナーで)

p.506

トウリヤーギ（五回目）

トウリヤーギは、冬祭りの最終回であり、同時に一年の締めくくりを意味する重要な祭りでもある。ふつう旧暦一二月の申の日で始まり子の日で終わる。（略）酉・戌・亥の日は、午前二時ごろにニガリをし、朝まで「祓い声」「ナービ声」「ヤーキヤー声」という神歌を謡いつづける。

ニフチクイ（根口声）はタービやフサを謡う時に、その前で謡うものである。ヤーキヤーグイ（ヤーキヤー声）は、神女が夏祭りと冬祭りで謡うものである。

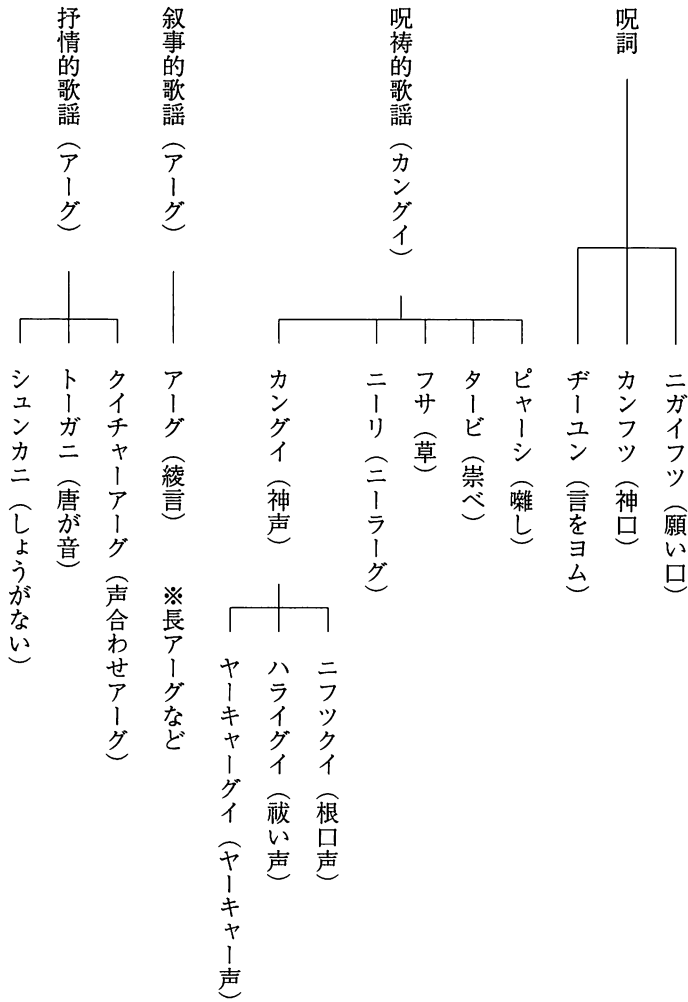
このようにみてくると、タービ、フサ、ピヤーシ、ニーリは謡われる内容、時、場所がはっきりとみえるが、ハライグイはその囃し「祓い祓い」、ヤーキヤーグイはその囃し「ヤーキヤー」で、ニフチクイは他の神歌の前で謡うもので、タービ、フサ、ピヤーシ、ニーリとは性格を異にする。これを狭義でのカングイで括りたい。ナービグイは、声をゆつくり伸ばしたもので、歌謡の名称ではない。ニフチクイ、ヤーキヤーグイとは違う。

アークは、祭式の場合から飛び出した生活の場での歌謡をさす。タービなどに見える前置きや結びの部分の呪祷的部分がなくなった長詩形の歌謡とみることができる。長アークとも言う。

外間のいう叙事的歌謡・抒情的歌謡である長アーク、クイチャーアーク、トーガニアーク、シユンカニを広義のアークとしてまとめる。多良間ではエーク、上野ではニーリとも言うが、宮古一般で言うアークの意味で用いられている。

クイチャーを叙情的歌謡に入れる。その理由は、短詩形歌謡のトーガニとの重なりがよく見られることや生活の場

での謡が多く、かなり叙情的であることによる。呪祷的アマグイ（雨乞い）クイチャーや長アーク的「チビビキバジ（尻に穴があいた桶）」などもあるが、これは例外的なものであろう。下記のようにまとめたい。



沖縄本島とその周辺の島々の古謡を集成した『おもろさうし』に対し、南島歌謡や言語のすべてを集成していこうとする伊波普猷の——琉球祝詞集成・琉球語大辞典——の構想。そのひとつであった『南島歌謡大成』は、外間の積極的な呼びかけに、奄美の田畑英勝・亀井勝信、沖縄の玉城政美・比嘉実・仲程昌徳、宮古の筆者、八重山では喜舎場永珣・上勢頭亨・宮良安彦が応えて完成したものである。このことは、決して忘れてならないことである。このほか編集作業では、外間ゼミの学生であった奄美の田畑千秋をはじめ、多くの学生達の協力があつて実現したものである。

そしてこの南島地域の歌謡の体系化や全体像を把握することができるようになった。そのきっかけを作った宮古調査に参加できたことは、筆者は幸運であった。

この事業を途中何度となく投げ出そうと外間は愚痴っていたが、その精神的な重圧は想像を超え体調を崩すほどであった。この宮古の歌謡体系化も如何に難渋してきたかが手に取るようにわかる。ジャングルを拓き、耕し、種を蒔いてきた外間の努力に敬意を表し、稿を閉じることとする。